

バーク経済思想研究の最前線

——「バークとスミス」はどのように論じられてきたのか——

中澤 信彦

中澤信彦・桑島秀樹編『バーク読本—〈保守主義の父〉再考のために』が2017年8月に昭和堂から刊行された。この書物（以下、「本書」と略記し、丸括弧に挟まれた数字は本書のページ数を指す）はこの小論の筆者（中澤）が深く関与した共同研究「社会学者としてのE.バーク：経済思想と歴史叙述の分析を基軸とした総合的研究」¹⁾の成果物として編まれたものである²⁾。

バーク（Edmund Burke, 1729/30-97）は18世紀イギリスを代表する政治家・著述家の一人として、とりわけその徹底したフランス革命批判によって〈保守主義の父〉として、一般に知られる。彼は哲学（崇高論・趣味論）や政治論（政党論、アメリカ論、インド論、フランス革命論等）の分野で大きな足跡を残しており、それら各々について多くの個別研究が内外で積み重ねられてきた。それにもかかわらず、彼と交流のあった同時代人A.スミスやD.ヒュームらと比べると、社会学者としてのバークの全体像はいまだ判然としないのが実状である。それはなぜだろうか。その理由として、すぐれて政治家であったバークの著作の大半が目まぐるしく変転する多様な問題状況（時事問題）への応答として準備された時論的な議会演説原稿・公開書簡・パンフレットであったこと、それらが体系的著作という形で残されなかったことが、しばしば指摘される。だが、より本質的な理由は、われわれが〈保守主義の父〉としてのバークというステレオタイプに慣れ親しみすぎており、それがもたらす安心感への過度な依存が色眼鏡のごとく作用してバーク思想の全体像把握に対する認識上の障壁・歪み・バイアスを形成してしまっていることにあるの

1) 日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究（B）（研究代表者：中澤信彦；研究課題番号：15H03332；2015-17年度）。

2) x+293+xxi ページ。本書の執筆者は、中澤信彦（編者、序章「〈保守主義の父〉再考のために—まえがきに代えて」、あとがき）、桑島秀樹（編者、第4章「崇高・趣味・想像力」、第5章「アイリッシュ・コネクション」、あとがき）、犬塚元（第1章「受容史・解釈史のなかのバーク」）、真嶋正己（第2章「アメリカ革命とフランス革命」、補論「アイルランド貿易制限緩和問題」）、荻谷千尋（第3章「インド論」）、佐藤空（第6章「歴史叙述」、第7章「経済思想(1)—制度と秩序の政治経済学」）、立川潔（第8章「経済思想(2)—財産の原理と公信用」）、高橋和則（第9章「自然法・自然権・社会契約」）、土井美徳（第10章「国家・古来の国制・文明社会」）、角田俊男（第11章「戦争・帝国・国際関係」）、以上10名である。10名のうち中澤・佐藤・立川の3名が経済学プロパーである。

ではないか。彼の経済思想および歴史叙述に関する研究の著しい立ち遅れは、そうした認識上の障壁がもたらした負の遺産の典型例ではないか。このような問題意識を導きの糸として、先の共同研究は開始され遂行された（2-4）。

その書名が示すように、本書は〈保守主義の父〉というステレオタイプに取まりきらないパークの広範な知的活動の全体を俯瞰するためのガイドブックとして編まれた¹⁾。本書の基本的な特徴は、本格的な考察が遅れていた彼の経済的著作と歴史的著作——18世紀ブリテンにおいては両者が明確な境界線を持たずに相互乗り入れしている場合が決して珍しくない（6, 15-16）——をパークが構想した/し得た社会科学の全体像把握にとって不可欠なものとして重視している点にあり（13）、この点において、本書は彼の経済思想についての専門的研究書としての性格も多分に有している。以下、この小論では、本書が切り拓かんとしたパーク経済思想研究の最前線を簡潔に紹介しつつ、本書が経済思想史研究に果たしうる貢献の可能性を示したい³⁾。

パーク経済思想研究における最もポピュラーなテーマ設定は昔も今も「パークとスミス」であり、二人の思想の類似性・親近性の程度が様々な論者によって様々な角度から考察されてきたし、考察され続けている。同時代人の二人が生涯を通じて個人的に親しい関係にあったことは事実であり、とりわけ、パークがこの世を去ってからほどなくして、R. ビセット『エドモンド・パーク伝』に、スミスがパークのことを「それまで面識はなかったのに経済問題について自分とまったく同じように考えていた自分の知る限り唯一の人」（Bisset 1800, ii, 429）と述べた、という逸話が記録された⁴⁾ことが、二人の経済思想の異同や影響関係についての高い知的関心を終始牽引してきた（Winch 1985, 231）。このテーマ設定において、最初に提起・解決されるべき問題は、『国富論』のような政治経済学分野における体系的著作を残さなかったパークが自らの経済思想のエッセンスを典型的に表現した著作をいかにして確定するか、であるはずなのに、遺憾ながらこれまでのパーク経済思想研究は内外を問わずこの最重要問題への取り組みを終始怠ってきた。『穀物不足に関する思索と詳論』（1795年、以下『不足論』）——対仏戦争中の深刻な飢饉に直面しても政府は穀物市場・労働市場に一切介入すべきでない、と主張した時論的パンフレット——こそがパークの経済思想の集大成であり、スミスのな自由市場論を展開した作品である、という通説——この解釈ではビセットが伝える「経済問題」が「自由市場」と確たる根拠もなく結び付けられている——が再生産されるばかりであった⁵⁾。本書はこのような根強い通説を俗説・事実誤認としてきっぱりと退ける（5, 182）。『不足論』の基本的な主張は、自由放任論でなく、穀物市場と労働市場における国家介入への批判にある。とりわけ労働市場に関して、習俗にもとづく社会

3) この小論は、自著解題的な性格のゆえに、本書序章と内容上の重複が少なくないことをあらかじめお断りしておく。なお、筆者は自著解題的な性格を有する別の文章（中澤 2017）をすでに発表している。あわせてお読みいただくと幸いである。

4) ただし、文献上の証拠は示されていない。

5) ケインズは例外的にこうした通説から距離を置くことができた（中澤 2018）。

秩序の尊重——賃金は慣習的な取り決めのもとで適切に設定されるものである——が主張されており⁶⁾、それはフランス革命批判と軌を一にしている (183-84)⁷⁾。

パークが自身の政治経済学分野における主著として認識していたのは、七年戦争勝利後のブリテン経済の状況をフランスのそれと比較して前者の優越を説いた『現在の国情』論 (1769年) である (174-75)。ブリテン帝国が直面していた植民地・課税・財政・公信用などの諸問題をめぐる包括的で体系的な考察こそが、パークが「政治経済学」という言葉によって指し示そうとした内容であり、ピセットの「経済問題」も——もし先の逸話が真実ならば——このような意味において理解されるべきである⁸⁾。

『現在の国情』論は、その議論の内容が詳細に考察されたことはほとんどなく、ましてやこの著作を経済思想家パークの主著の一つとして重視すべきだとの見解は、内外のパーク研究においていまだ十分な注目を集めていない⁹⁾。だからこそ本書は、今後のパーク経済思想研究は『不足論』でなく——ましてや『フランス革命の省察』(1790年)でもなく——『現在の国情』論を中心として展開されるべきである、と力説する。もともと『現在の国情』論はW.ノックス『現在の国情』(1768年)に示されたブリテン経済に関する悲観的な見通しを反駁するために書かれたものだが、この『現在の国情』をスミスは『国富論』(第4編第1章)で参照した (Winch 1996, 138-39)。この事実からだけでも、『現在の国情』論がパーク研究とスミス研究を架橋する最重要著作であることが容易に理解できよう。

パークが『現在の国情』論で航海法について、植民地政策の「要石」となって漁業、農業、造船業などの産業の発展に寄与してきた、と高く評価したことは注目に値する (175, 177)。たしかにパークの著作には自由貿易を唱える言説が多く見られ、そのことが『不足論』の(誤解された)自由市場論と結びつき、「パーク=(スミスの、あるいは、スミス以上に極端な)自由市場論者」という通説的理解を生み出し続けてきた¹⁰⁾。しかし、パークが主張していたのはあくまで帝国内自由貿易であり、彼が帝国外も含めた国際貿易の完全な自由化を求めたという事実は存在せず、自由貿易の確立を一般原則として希求していない (177, 218)。それゆえ、パークもスミス

6) 佐伯 (1999, 42-52) はスミスの労働市場観にはほぼ同様の主張を認めるたいへん興味深い研究である。

7) 立川 (2014) がより精緻な議論を展開している。こうした考察視角を欠く中澤 (2009, 第2章) は、今となってはかなり不十分な研究である。

8) パークは政治経済学という学問が17世紀のイングランドで誕生したとはっきり述べており、それがスミス (あるいはJ.ステュアート) によって生み出されたとする今日の常識はパークの受け入れるところでない (中澤 2009, 199-200; Nakazawa 2010)。

9) 岸本 (2000, 90-103) は『現在の国情』論の内容を比較的詳しく考察した稀有な先行研究である。また、Prendergast (2010, 254-55) も短い考案ながら貴重な先行研究である。

10) 東インド会社による商業独占への批判を含むゆえに『不足論』と同様にパークの自由主義的な経済思想が表現された著作であると見なされることの多かった『特別委員会の第九報告書』(1783年)についても、インド社会の歴史的展開に関するパーク自身の理解との照合なしでその内容を正しく理解することができない、と本書は主張する (178-79)。

も航海法のメリットを認めていたけれども、そのメリットと自由貿易との関係についての二人の見解の間には無視できない相違があったことになる (Winch 1996, 140)。さらに言うならば、生涯を通じて自由貿易と保護貿易の主張を併存させてきたバークの経済思想の核心を、「必ずしも自由市場を擁護しておらず、国・地域に様々な形で存在している「制度」に着目し、優れた「制度」が商業の発展を支えるという見解」(14)に見て、それを「制度と秩序の政治経済学」として特徴づけようとする本書(特に第7章)の試みは、初期近代の経済思想史研究を強く規定してきた「重商主義(保護)から古典派経済学(自由)へ」図式に抜本的な見直しを迫る点できわめて挑戦的であると言えよう。

バークとスミスの共感論の比較、バークとヒュームの信用論の比較、バーク『イングランド史略』とヒューム『イングランド史』の比較、バークの文明社会論におけるスコットランド啓蒙の言語への依拠といった論点にも本書の考察は及んでいるが、紙幅の制約によりこれ以上詳しくは論じられない。この小論の読者諸氏が本書を実際に手に取って〈18世紀ブリテンが生んだ偉大な社会学者〉バークの思想世界をじっくりと味わってくださることを期待したい。

(中澤信彦：関西大学)

参 考 文 献

- Bisset, R. 1800. *The Life of Edmund Burke*, 2nd ed. 2 vols. London: George Cawthorn.
- Nakazawa, N. 2010. The Political Economy of Edmund Burke: A New Perspective. *Modern Age* 52 (4): 285-92.
- Prendergast, R. 2010. The Political Economy of Edmund Burke. In *Contributions to the History of Economic Thought: Essays in Honour of R. D. C. Black*, ed. by A. E. Murphy and R. Prendergast. London: Routledge.
- Winch, D. 1985. The Burke-Smith Problem and Late Eighteenth-Century Political and Economic Thought. *Historical Journal* 28 (1): 231-47.
- . 1996. *Riches and Poverty: An Intellectual History of Political Economy in Britain 1750-1834*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 岸本広司. 2000.『バーク政治思想の展開』御茶の水書房.
- 佐伯啓思. 1999.『アダム・スミスの誤算—幻想のグローバル資本主義 (上)』PHP新書.
- 立川 潔. 2014.「エドモンド・バークにおける市場と統治—自然権思想批判としての『穀物不足に関する思索と詳論』」『成城大学経済研究所研究報告』67.
- 中澤信彦. 2009.『イギリス保守主義の政治経済学—バークとマルサス』ミネルヴァ書房.
- . 2017.「『バーク読本』(昭和堂, 2017年8月)の編集から見てきたこと」『関西大学経済論集』67 (3): 161-72.
- . 2018.「政府の「なすべきこと」と「なすべからざること」—ケインズはムーアとバークから何を学んだのか」只腰親和・佐々木憲介編『経済学方法論の多元性—歴史的視点から』蒼天社出版, 313-40.